というのは、『明暗』のような基準点が明確に存在し、それに照してダメだ、ということだったのだが、いつのまにかそうした基準点は消えてなくなってしまったようなのである。

何かの理由で、ここ十五年くらいの間に人間とか倫理とかいったテーマが消えてしまった。そういう中では、「私」がそのまま（中間項なしで）宇宙に向かい合ってもいいじゃないか、という重田さん流の考え方はそれほど特異なものではなくなってきている。そもそも小説としてどうのというのがおかしいので、作品でありさえすればいいのである。

そう考えて重田さんの作品を読んでみると、宇宙に向かい合っている「私」は、伝説として伝わってきている「繊細な文学青年」そのままだということがわかる。重田さんは変ったのではなく、むしろ変っていない。そしてその点で貴重なのだ、と思う。

もちろん、全く変っていないというのではない。人間的なものの不在という一点は一貫して変っていないが、宇宙や世界と対している恐ろしく内面的な「私」は、深まって一種の翳りを帯びている。第一作品集である『風の貌』と比べると、「私」が信じられている度合は低くなっている。

『風の貌』に比べて今度の作品集は成熟を感じさせる。だがそれは、何かが変化したことによる成熟ではなく、資質に従って一貫する中で生み出された成熟である。この一貫性は人をたじろがせる。（評論家）

成熟した肉眼の所有者

紅野　敏郎

重田君はつねに重厚な主題に向ってひたすらに書く男であった。大学時代から「書く」ということに執念を燃やしていた。最初は長編小説を上梓、秋山駿らに注目され、このたびは短編小説集を上梓する。その間しばらくの中断があったが、それも蓄積、耐えて待つ姿勢、と私には見えた。

四国出身の彼だが、都会人の鋭敏にして繊細な感覚は十分に身につけていた。彼にはいわゆる「軽薄短小」のイメージはまったくない。その文体もしなやかで、重い主題を巧みに消化、読後の印象はつねに鮮明。センテンスとセンテンスとの間に接続詞を使うことを意識して嫌う。不透明なものを追いかけながらも、その文章は透明である。青春のニガサを通り越し、成熟した肉眼の所有者としての重田君がそこに佇っている。

教師としての私ではなく、重田君の小説の一人の読者としての私になりきってもう幾年経たことであろう。このたびの短編集は、それ自体の完成度を示すとともに、新たな次の跳躍台、バネの役割を果すに違いない。

若い頃の作品も含まれているが、四十歳を越えてからの「岬の貌」や「ビッグ・バンの風に吹かれて」には、かつての重厚さを残しながらも、決して観念過剰とはならず、バランス感覚の横溢した作品となり得ている。若き日の「夏薔薇」「投射器」には、早くから「書く」気の男であった証しが明白に読みとれる。

彼の文章には一種のスピードがあり、そのスピードは短距離選手のそれではなく、長距離選手のリズムに似たところがある。調子を乱すことなく、先頭集団にまじりつつ、機を見て一気に飛び出す姿そのものといってよかろう。

「書く」魅力にとらわれつつも、醒めた眼で現実を見据え、リズムを崩さぬところが彼の長所である。コケの一念というのではなく、巧みに間をとったこのたびの小説集。そういう彼を私は支持した。

（早稲田大学教授）